

大学選手権決勝の舞台裏を語る

天理大ラグビー部・小松節夫監督

村上氏の司会で トークイベント

天理大学ラグビー部監督の小松節夫氏を迎えてのトークイベントが、先ごろ大阪市内のニュージランドレストランで行われた。司会は、『ハルのゆく道』(道友社刊)の著者でラグビージャーナリストの村上晃一氏。「天理ラグビーの真髄について」をテーマに、大学選手権決勝の舞台裏やチームの成長過程などが紹介された。

まずは、大学選手権決勝戦について。ずばり敗因は？

やはり「完全アウェー」というか、私自身も経験したことのないような異様な雰囲気でしたね。準決勝の帝京大戦も同じくらいの観客数でしたが、そのときは

どちらかといえば、天理を

応援してくれていたかもしれません。スタンドの周囲から降ってくるような大歓声は、選手にとっても相当なプレッシャーだったと思います。

試合後、「自分が甘かった」と話していました

勝負に対する厳しさです



小松監督は、村上氏の質問に答える形で大学選手権決勝の舞台裏について語った

(1月29日、大阪市の「マヌカ」で)

ね。大学選手権に入ってチームの調子が良かったので、準決勝から決勝までの間に「けが人を出さないこと」「チームコンディションを下げないこと」を意識していた。このままうちの力を出せば勝てるだろうと思いい、もっと厳しく、とはならなかった。

7年前の立川理道キャプテン時代に決勝で対戦したとき、フィジカルは完全に負けていました。あのときの戦い方は、フォワードはとにかく我慢して、バックスで点を取るというスタイルでしたが、あの試合の教訓から、フィジカルやスクラムの重要性を強く意識するようにになりました。

スクラムが強くなりましたね。強化のためにやったことは。

ウェイトトレーニングで体づくりをすること、ひたすらスクラムを組むことです。

全寮制になり、選手の栄養管理ができるようになった。朝練(早朝練習)を始めたのも大きいですね。

決勝直後、明治のチームが集合写真を撮っている様子を、天理の選手たちがじっと見つめていた姿が印象的でした。

実は私自身、7年前の決勝戦直後の記憶がないんです。それくらい、試合に負けた悔しさで周囲が見えていませんでした。

でも今回は、少し考える余裕があった。優勝した明治大は、昨年の決勝戦を1点差で負けた。帝京大も、9連覇する前は早稲田大に決勝で負けて悔しい思いをした。両チームとも、そこから優勝への新たな挑戦が始まっている。ここは、相手チームの喜ぶ姿を目に焼きつけさせたいと思います。見るように言ったのです。

今回、頂点に立てなかった原因を考えると、うちのチームに足りなかったものは「経験」だったと思う。

この貴重な経験を生かして、次こそ日本一をつかみたいと、思いを新たにしています。

帝京戦勝利の要因

ところで、王者の帝京大に勝った話を聞かせてください。

あの試合は出来過ぎでした。練習試合を含め、一度も勝つことがない相手だっただけに、帝京大を倒さずして日本一にはなれないと、みんな気が入っていました。

でも決勝では、とにかくボールを追いかけてひたすら走っていた。それが、味方からパスをもらってトライを決めるという結果につながった。彼の頑張りで、あのような接戦ができたかなと思います。

あんな姿は初めて見ました。彼は地味なプレーが信条で、重要な場面では起点をつくってくれる良いキャプテンです。

でも決勝では、とにかくボールを追いかけてひたすら走っていた。それが、味方からパスをもらってトライを決めるという結果につながった。彼の頑張りで、あのような接戦ができたかなと思います。